慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パスカルの賭けについて : 理性と習慣
Sub Title	Du pari de Pascal : raison et habitude
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.120 (2008. 3) ,p.19- 34
JaLC DOI	
Abstract	Le fragment infini-rien commence par constater la limite de connaissance humaine. On ne peut connaitre ni l'existence ni la nature de Dieu. Et dans cette condition, on est force a choisir entre deux facons de vivire: avec ou sans Dieu. C'est ce qu'on appelle le pari de Pascal. Comme le Dieu est completement etranger a la raison humaine, le choix est necessairement incertain. Mais quand meme le pari doit etre raisonnable. Le role de la raison ici n'est plus speculatif, mais pratique. En pariant pour Dieu, qu'est-ce qu'il faut faire exactement? En effet, le pari n'est pas que la decision ou le choix. Ce qui est important, c'est soumettre toute sa vie au Dieu. Pour cela, Pascal conseille a celui qui ne peut pas parier de contracter des habitudes qui le rend humble et modeste. Cette humilite est ce qu'il gagne dans ce monde.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000120-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

パスカルの賭けについて

——理性と習慣——

西　山　晃　生*

Du pari de Pascal

—raison et habitude—

Teruo Nishiyama

Le fragment infini-rien commence par constater la limite de connaissance humaine. On ne peut connaître ni l'existence ni la nature de Dieu. Et dans cette condition, on est forcé à choisir entre deux façons de vivire: avec ou sans Dieu. C'est ce qu'on appelle le pari de Pascal. Comme le Dieu est complètement étranger à la raison humaine, le choix est nécessairement incertain. Mais quand même le pari doit être raisonnable. Le rôle de la raison ici n'est plus spéculatif, mais pratique.

En pariant pour Dieu, qu'est-ce qu'il faut faire exactement? En effet, le pari n'est pas que la décision ou le choix. Ce qui est important, c'est soumettre toute sa vie au Dieu. Pour cela, Pascal conseille à celui qui ne peut pas parier de contracter des habitudes qui le rend humble et modeste. Cette humilité est ce qu'il gagne dans ce monde.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（倫理学）

はじめに

本稿でわれわれが扱うのは，パスカルの『パンセ』のひとつの断章(B233, L418)[1] である．この断章は通常「賭け pari」，あるいは「パスカルの賭け pari de Pascal」と呼ばれる一連の議論を含む．「パスカルについて書かれた一般的な著作は，そのほとんどがそれについて重要な部分を割いている」[2] といわれながら，この断章が持つ意味は解釈者によって全く異なったものになっている．それは，われわれがこの断章をどのように読み，どの側面に注目するかによって全く異なった姿を現すからだ．しかし，ここで諸家の解釈を比較検討する余裕はない．さしあたり，われわれが注目しておきたいのは，この断章が対話の形で書かれていることである．賭けへの参加を勧めるパスカルに対し，対話相手は三度にわたって躊躇を示す．その各々に対するパスカルの答えこそがこの断章の論点を明確に示すとわれわれは考える．

第一の論点は賭けの必然性に関わる．よく知られているように，賭けの対象は神の存在である．しかし，なぜ賭けはなされなければならないのか，賭けに参加しないことはなぜ許されないのか，ということが問題になるだろう．

第二の論点は賭けの合理性に関わる．パスカルは議論の重要な局面で，賭けが「理性にかなうこと」「理性に悖らないこと」を強調する．何がこの合理性を保証しているのか．賭けの議論における理性の役割が問われるだろう．

第三の論点は賭けの継続性に関わる．神が存在する方に賭けるというとき，人は具体的には何をしているのか，それは単に神を信じることとはどこがどう違うのか．ここで重要なのは，賭けが一度きりの選択ではなく，続けられるということである．

われわれは最初の三節で以上の論点を順次検討した後，賭けの議論全体

の意味について論じる．それは次のような形をとる．

『パンセ』はキリスト教護教論の計画に基づいて書かれたものであり，賭けの議論もその中に位置づけられそうである．そうした面から見る限り，キリスト教にコミットしていない者にとっては理解しづらく，また説得力を欠くように感じられるだろう．しかし，別の読み方をする可能性はないだろうか．賭けの議論がキリスト教の信仰と切り離しえないことは確かだとしても，パスカルが議論を通じて肯定しようとしていたものを信仰の他にも見出すことができるのではないか．結論部でこの点に触れる．

1. 賭けの必然性——強制的参加——

議論はパスカルが仮想の対話相手を説得するという形で進められる．それはもちろん，神が存在するほうへ賭けることへの説得である．しかし，そうした議論を検討する前に，両者が共有する前提を確認しておこう．断章は認識の限界を指摘するところから始まる．

> 「われわれの魂は身体のうちに投げ入れられ，そこで数，時間，空間 dimension を見出す．魂はそれらについて推論し，それを自然，必然と呼び，他のものを信じることができない」．
>
> 「したがってわれわれは有限なものの存在と本性を知っている，というのも，われわれは有限であり，有限なものと同じように延長しているからである」．
>
> 「しかし，われわれは神の存在もその本性も知らない，というのも神は延長も限界も持たないからである」．

ここでは有限なものと無限なものとの絶対的差異を根拠に，神を認識することの不可能性が語られている．もっとも，この不可能性には留保がつけられる．パスカルの立場からすれば，信仰によって神の何であるかを知

ることはできるからである．しかし，「自然の光に従って語」る，つまり理性のみをよりどころとする限り，神は「無限に理解不可能」なものとなる．理性の認識のみによっては，われわれは神を知ることも信じることもできない．ここが議論の出発点である．パスカルの対話相手は信仰を持たず，理性に従って行動する人間にほかならない．

したがって，ここで問題になるのは，理性の認識能力が及ばないところで，それでもなお合理的な仕方で，つまり理性に背かない仕方でふるまうにはどうすればいいか，ということである．もはや行動を照らしてくれる確実な認識は存在しない．それならば，いずれも不確実なものである複数のものの中から選択するしかない．神が存在するほうに賭けるか，あるいは存在しないほうに賭けるかという議論はこのようにして導入される．

ここでわれわれが直面しているのは，認識の問題ではなく実践の問題である．神が「われわれとまったく関係を持たない」ものである以上，問われるのはわれわれがどうふるまうかであろう．ここで迫られているのはもちろん，神が存在するかどうかの決定ではない．そうではなくて，神とともに生きることと神なしで生きることとの間での，生き方の選択が問題になっているのだ．したがって，与えられた選択肢も適切な仕方で言い直される必要がある．「神が存在するほうに賭ける」こととは，神が存在するものとして生きること，神が存在しないほうに賭けるとはその逆である[3)]．

重要なのはここで登場する対話相手が，特定の選択にではなく，賭けに参加すること自体に躊躇を示していることだ．実際のところ，この断章においては賭けに参加するか否かを巡る議論が多くの部分を占める．神が存在しないほうに賭けることは選択肢として与えられてはいるものの，最初から問題にされていない．問われているのはほぼ一貫して「賭けるか賭けないか」であって「どちらに賭けるか」ではない．

神について何も知りえない以上，どちらの選択をしても理性を裏切るこ

とにはならず，たとえ選択が誤っていたとしても非難することはできない，とパスカルは言う．これに対して，対話相手は次のように反論する．

「いや，私は彼らがこの選択をしたということをではなく，選択をしたということを非難するだろう．というのも，表を選ぶ者も裏を選ぶ者も同じく誤っているにしても，両者とも誤っているのにはかわりがないからだ．正しいのは全く賭けないことである」．

彼にとっては，認識の及ばないことに関しては態度を保留するのが合理的であり，見通しの立たないままどちらかに賭けること自体が理性に悖る行為である．しかし，パスカルはこの言い分をあっさりと退ける．賭けはなされなければならない（「それは任意のものではない．君は既に船に乗り込んでしまっているのだ」）．だが，なぜ賭けを回避することは許されないのか．パスカル自身はその理由を明確に述べていないので推測するしかないのだが，消極的な理由と積極的な理由が考えられる．

消極的な理由のほうは『パンセ』の他の断章のうちに見出すことができる．

「どれだけたくさんのことが不確かなもののためになされてきただろうか．航海や戦争など〔がそうである〕」(B234, L493).

「ところで，人が明日のため，不確かなもののために働くとき，彼は合理的に行為している．というのも，証明された分配の規則[4]によって，人は不確かなもののために働かなければならないからである」（同上）．

つまり，事実として人は不確かな認識しか得られないまま行為してきたし，また，それが不合理ではないということはパスカル自身が証明したと

いうわけだ．しかし，これは一般論である．今問題となっているケース，つまり神が存在するかしないかについての賭けがなぜなされなければならないかを説明するためには積極的な理由が必要だろう．

このケースには，他と大きく異なっている点がひとつある．それは生に占める比重の大きさである．既に述べたように，神が存在する方に賭けることとは，神が存在するものとして一生を生きるということにほかならない．「君は既に船に乗り込んでしまっているのだ」とパスカルがいうとき，このような生の全体に関わる問題と直面している以上，それに対して態度を保留することは不可能だということが含意されているだろう．

2. 賭けの合理性——公平な選択——

さて，ここまでで賭けの成立条件が二つ示された．結果に関する見通しが全く立っていないことと，参加が強制されていることである．これらは何を意味するだろうか．

神が存在するほうに賭ける者は，その方が真実らしく見えるからそうするのではない．神の存在に関する認識が完全に閉ざされている以上，そのような根拠づけは不可能である．また，道徳的により良いと思うからそちらを選ぶのでもない．神の性質に関する認識が与えられていない以上，どちらが道徳的により良いかなどとはいえないはずだ．したがって，ここではどちらの選択肢が自分により多くのものをもたらすか，という観点から決定がなされる．

そこでパスカルは，賭けの損得勘定を示す．先にも述べたように，神が存在する方へ賭けることとは神がいるものとして一生を生きることであるから，賭け金は彼の生そのものである．もし実際に神が存在した場合，彼は「無限に幸福な無限の生命」を得られるだろう．また，もし神が存在しなくても失うものは何もない．だから，神が存在するほうへ賭けるべきである，というのがパスカルの勧めである．だが，対話相手はここでもまた

賭けることをためらう．今度は賭け金が問題にされている．

> 「そうだ．賭けなければならない．しかし，おそらく私は賭けすぎているのだ」(傍点引用者)．

彼が「賭けすぎている」と言うとき，疑われているのは賭けの公平さである．二つのことが問題になりうるだろう．第一に，本当に「失うものは何もない」のかどうかということであり，第二に「身をさらすことの確実さと勝ち取るものの不確実さ」との間に無限の距離が想定されうるということである．

第一の点はこの議論の前提，すなわち有限なものと無限なものとの間にある無限の距離によって退けられる．賭けられているもの，つまり生が有限であるのに対し，得られるものは無限である．後者と比較すれば，前者は無に等しい．パスカルが「失うものは何もない」というとき含意されているのは，この相対的な取るに足らなさにほかならない．取るに足らないものを差し出して「無限に幸福な無限の生命」を得るチャンスがあるのだから，神の存在する確率がゼロでない限り，賭けないでいることのほうこそ「理性を放棄しなければできない」．

しかし，ここで新たな疑問が生ずる．神が存在するほうへ賭ける場合，彼の一生は確実に差し出されるのに対し，「無限に幸福な無限の生」が得られるかどうかは不確かである．この確実さと不確かさの間にもまた無限の距離があるのではないか．そしてそれは有限な生と無限な生との間にある無限の距離と相殺されるのではないか．これが第二の点である．

ここでパスカルの反論は二つの論点を含む．まず，賭けとはそもそも「有限な利益を不確かな仕方で得るために，有限なものを確実に賭ける」行為であり，それは「理性に悖っていない」．

そのことを確認したうえで，ここで問題となっている点，つまり確実さ

と不確かさの間に無限の距離があることは否定される．両者は同じ尺度で測ることができるからである．

> 「…勝つことの不確かさは，勝つ運と負ける運の間の比率に応じて，賭けられるものの確実さと釣り合うのである．したがって，両者に同じ運があるならば，勝負は対等に行われる．そしてそのとき，身をさらすことの確実さは利益を得ることの不確かさと等しい」．

「身をさらすことの確実さ」は賭けに参加するための条件に過ぎず，また賭け手の側から見たものでしかない．実際に比較されなければならないのは，「勝つ運と負ける運の間の比率」すなわち確率によって示される，さまざまな度合いを持った不確かさである．

こうして，神が存在するほうへ賭ける者が「賭けすぎている」という主張に基づいた疑問は退けられる．この時点でパスカルは賭けの合理性，そして神が存在するほうへ賭けることの合理性を証明し終えたと考えているようだ（「これには証明する力がある．そして，人間に何らかの真理が可能であるならば，これこそがまさにそうだろう」）．対話相手もそのことに同意する．だが，議論はここで終わらない．対話相手を賭けへと引き込もうとするもくろみは合理性と別の面から抵抗を受け，そう簡単にはいかないからだ．賭けの合理性を認めるということと，実際に賭けることができるということは別である．

3. 賭けの継続性——習慣の力——

ここまで議論が進んでも，対話相手はまだ進んで賭けることができない．

「だが私は手足を縛られ，口をふさがれており，賭けることを強制されている．私は自由ではない．解放してもらえない．そして私は信じることができないようにできている．私に何をしろというのだ」.

賭けの合理性については既に解決済みである．合理的であることを認めつつも，この世の生に，つまりは「情欲 passion」に固執するため，なかなか決断することができない意志の弱さがここでは問題になっている．したがって，必要なのはこれ以上理性に訴えることではなく「情欲を弱めること」にほかならない．そのために持ち出されるのは，論証とは別の説得手段である．それは何か．パスカルは別の断章で以下のように述べている．

「…われわれは，精神であるのと等しく自動機械 automate である．…習慣 coutume は自動機械を傾けさせ，自動機械は精神を知らないうちに導いていく」(B252, L821).

自動機械としての人間，つまり身体を習慣によって一定の方向へ導くことによって「強制も技巧も議論もなしに」(B252, L821) 物事を信じさせることができる．証明する手段がないこと，たとえば「明日が来るだろうということ，われわれが死ぬだろうということ」(B262, L821) を，われわれが何にもまして信じているのはこの習慣の力による．対話相手の陥っている不信仰が「病」であるならば，これを癒す方法として習慣に勝るものはない．パスカルが勧めるのは模倣による習慣の形成である．

「君と同じように縛られていながら，今ではすべての幸福を賭けている人たちから学びなさい．…彼らがそこから始めたその方法に

従いなさい．それはあたかも信じているかのようにすべてを行うことによってであり，聖水を受け，ミサを唱えてもらうことなどによってである」（傍点引用者）．

神がいる方に賭けるとき何をすればいいのか，ということがここで初めて具体的に示された．それは，教会の教えに従ったつつましい生活を送ることであり，そうした習慣を身につけることを通じて情欲を減らし，現世における幸福へのこだわりを徐々になくしていくことである．

そうした歩みを一歩たどるごとに，「賭けたもののむなしさ néant」が知られ，ついには「何も手放さなかった」ということが実感される．もし賭けることの内実がそのようなものであるならば，それは一見逆説的なありかたをしているように思われる．というのも，賭けへの参加自体が賭けを無意味なものにしてしまうからだ．

しかし，そのように見えるのは賭けを「表か裏か」の勝負のイメージでとらえているからである．既に述べたように，パスカルの賭けとは生き方を選ぶことであり，そしてそれにも増して選んだ生き方に一生をささげることである．このようにとらえるなら，神が存在するほうとしないほうのどちらを取るかという決断は賭けの入り口に過ぎず，一度下した決断に沿った生き方を続けていくことのほうがはるかに重要なことになるだろう．賭けることとは賭け続けることであり，もしそこに勝負があるとすれば，それは続けることができるかどうかに関わる．

さて，賭けの内実が習慣の形成と強化にあるのならば，賭けは最終的には理性に関わらないと考えてよいのだろうか．つまり，賭けとは理性の二つの限界（神を認識することの不可能性と，行動を導くことの不可能性）を超えていくことによってなされると見ていいのだろうか．そうなのではないかと一見思わせる有名な一文が先の引用箇所に続いている．

「君は自然と信じるようにされるだろうし，愚かにされるだろう」[5]（傍点引用者）.

「愚かにされる」とはどのようなことだろうか．賭けること，そして神が存在するほうに賭けることは，合理的な選択として示されていたはずである．その選択の結果がなぜ「愚か」になることなのだろうか．

しかし，ここで問題になっているのは理性を捨て去ることではない．そうではなくて「すべてを判断しようとする理性をへりくだらせるhumilier」(B282, L110) ことである．それは理性の能力を超えたものに対する推論を差し控え，聖書と教会の教えに従い謙虚になることを意味する．重要なのは，何かに強いられるのではなく，理性自身の進展の結果そうなるということである（「理性の最後の歩みは，自らを超越するものが無限にあるということを認めることである．それを知るところまで行かないならば，理性は弱いものでしかない」(B267, L188)）.

したがって，賭けは理性から離れることによってなされるのではなく，最後まで理性とともにあるといえる．

ここまでで，冒頭に掲げた三つの論点，すなわち賭けの必然性，合理性，継続性について論じてきた．ここで，これらの関係について簡単にまとめてみよう．

賭けの議論において，パスカルは理性の役割が変化する事態を描き出した．理性はもはや確実な根拠に基づいて決定を下すのでなく，不確かな状況において選択を導くのである．この選択が合理的でありうるのは，それが強いられたものである場合に限る．というのも，もし選択が任意のものであるならば，対話相手が言うように「正しいのは全く賭けないこと」である可能性を排除できないからだ．したがって，賭けの必然性はその合理性の前提である．

神の存在に関する賭けとは一度限りの決断ではなく，継続的なものであ

る．そのために習慣が必要とされる．しかし，なぜ習慣を身につけ，強化し続けることができるのか．それは，その正しさが理性によって保証されているからである．言い換えるなら，賭けの継続性はその合理性によって支えられている．

賭けの議論が描き出しているのは，神の存在という理性の力が及ばない問題に直面した人間が，それでもなお理性的にふるまおうとしたとき，どのような行動に導かれるか，ということである．

4. 議論の評価と解釈

さて，われわれには別の論点が残っている．賭けの議論は『パンセ』の計画，つまりキリスト教護教論のうちでどのような意味を持っているかのだろうか．

前節までで確認したのは，賭けが理性に適った仕方でなされるということ，そしてその内実が習慣の形成と強化にあるということだった．ここで習慣の役割について検討してみよう．賭けることができない対話相手に対してパスカルが勧めたのは「あたかも信じているかのようにすべてを行うこと」である．ここが具体的な賭けの出発点となる．では今まさに賭け始めようとしている者と「今ではすべての幸福を賭けている人たち」，つまりよき習慣を身につけ，既に不信仰から「癒された」人たちとの違いはどこにあるのだろうか．

習慣を身につけるごとに「あたかも信じているかのように」ふるまうことへの抵抗は薄れていくだろう．しかし，これは程度の差異でしかない．実は，両者の本質的な違いはどこにも見出されない．というのも，神に関する認識が全く与えられない以上，神に賭ける者は習慣をいくら身につけようとも「あたかも信じているかのようにすべてを行うこと」しかできないからである．したがって，習慣によって「自然と信じるようにされる」というとき，信じることとは，ためらいなく「信じているかのように」ふ

るまうこと，でしかない．このことは，『パンセ』の他の断章とも整合的である．

「…宗教を持たないものたちに対しては，われわれは推論によってしか与えることができないのだが，それは神が彼らに心の感情によって与えるのを待つ間のことであり，そのことがなければ信仰は人間的なものでしかなく，救済の役には立たない」(B282, L110).

信仰は「神の賜物」(B279, L588) であって，人間が理性の力によって到達できるものではない．賭けによって到達できるのは「人間的な」信仰，つまり信仰の準備段階までででしかない．

賭けの議論がそれ自体でキリスト教の擁護にどれほど寄与するかということもまた問題である．というのも，その存在に賭けられているのがキリスト教の神であり，形成される習慣が「聖水を受け，ミサを唱えてもらうこと」である必然性は特に感じられないからだ．全く同じ議論を用いて別の宗教を擁護することもできそうである．

パスカルによれば，人間の卑小さを教え，自覚を促す真の宗教はキリスト教のみである（B433, L201 などを参照）．こうした他の断章の記述と併せて読むならば，ここで問題になっているのは事実上キリスト教の神でしかありえないとは言えるだろう．しかし，そのような議論はキリスト教にコミットしていない者にとっては説得力を持たないであろう．

「信じることができない」対話相手を，理性の力のみで信仰へ導くことが議論の目的なのだから，こうした前提を必要とするような導入の仕方は本末転倒ではないか．また，そもそも「無限に幸福な無限の生」という前提を受け入れられない者にとっては，議論そのものが無意味なものになってしまうのではないか．このような批判はごく一般的である．たとえばイアン・ハッキングは，パスカルの議論（賭けの合理性に関する議論）が，

それ自体としては整合的であることを認めたうえで，以下のように述べている．

「これらの議論は今日，護教論としては無価値なものである，というのもこの議論を理解した現在の不可知論者のうちで，〔パスカルの〕すべての前提を受け入れるよう動かされる者など誰もいないだろうからである」[6]．

しかし，重要なのはパスカルの前提をすべて受け入れることではない．無限なものを想像して自らの卑小さを知ること，そしてその状況を肯定的にとらえることがこの断章で求められ，勧められているのである．最後にこのことを論じておこう．

5. 結　論

前節では，賭けの議論の欠点を強調した．それは信仰の準備段階をなすものでしかありえず，また文化的，時代的な制約がかかっており，前提を共有する者でないと共感しがたいものであった．しかし断章の末尾近くには，護教論の一部には収まりきらない別の読み方を促すような箇所がある．ここでパスカルは神に賭ける者がこの世において得るであろう利益に言及している．

「さて，こちらを取る〔神がいるほうに賭ける〕ことによって，君にどんな悪いことが起きるというのだろうか．君は忠実で，正直で，謙虚で，感謝を知り，親切で，友情に厚く，まじめで，真実を語る者になるだろう．実際のところ，君は害をなす快楽や，栄光や，悦楽のうちにあることは全くなくなるだろう．しかし，君はほかのものを得ないだろうか」．

パスカルがこのように言うとき，彼は永遠の生命や幸福についてではなく，この世界におけるよろこび，われわれが努力によってたどり着けるよろこびについて語っている．それはもちろん情欲を満たすようなものではない．そうではなくて，絶えずよりよい人間に変わっていくことそのもののうちにあるよろこびである．護教論的には賭けは信仰の準備段階にすぎないとしても，賭けることそれ自体のうちに得るものがあるとパスカルは考えているようだ．

パスカルは「無限に幸福な無限の生」との対比を際立たせる形で，この世の生の「むなしさ」を説いてきた．しかし，これは厭世的な態度を勧めるものではない．むなしさを自覚することによってよりよく生きる道が説かれているのである．

賭けの議論は，その具体的な実践についての記述まで視野に入れるならば，この世で生きることを徹底的に肯定する思想をわれわれに示しているのではないだろうか．

註

1) 『パンセ』からの引用はすべて断章番号によって示す．Bはブランシュヴィック版，Lはラフュマ版である．なお，断章番号を付さない引用箇所はすべてB233, L418からのものである．
2) Henri Gouhier *Blaise Pascal Commentaire.* Vrin, 1971, p. 245.
3) この点に関してはGouhier, *ibid*, p. 254. を参照．
4) この「分配の規則」は *Traité du triangle arithmétique* (*Euvre complètes II*, éd Jean Mesnard, p. 1308.) において定義されている．なお，「分配の規則」と賭けの議論との関係を強調した解釈として以下のものを参照．Laurent Thirouin, *Le Hasard et les règles: le modèle du jeu dans la pensée de Pascal*, Paris, Vrin, 1991, pp. 130–189.
5) 「愚かにされる s'abêtir」という語の解釈については以下を参照した．Étienne Gilson,《Le sens du terme "abêtir" chez Pascal》, in *Les idées et les lettres*, Paris, Vrin, 1955, pp. 263–274.
6) Ian Hacking,《The logic of Pascal's wager》, in Jeff Jordan (ed.), *Gam-*

bling on God, Rowman & Littelefield Publishers, Inc., 1994, pp. 27–28.

参考文献

Gilson (Étienne), 《Le sens du terme "abêtir" chez Pascal》, in *Les idées et les lettres*, Paris, Vrin, 1955, pp. 263–274.

Gouhier (Henri), *Blaise Pascal comentaire*, Vrin, 1971.

Hacking (Ian), 《The logic of Pascal's wager》, in Jeff Jordan (ed.), *Gambling on God*, Rowman & Littelefield Publishers, Inc., 1994.

Thirouin (Laurent), *Le Hasard et les règles: le modèle du jeu dans la pensée de Pascal*, Paris, Vrin, 1991.